



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学入学後に伸びる素質の評価とA0入試の役割
Author(s)	小笠原, 正明; 阿部, 和厚; 石川, 健三 他
Citation	高等教育ジャーナル, 8, 99-107
Issue Date	2000
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.8.99
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29706
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_P99-107.pdf



大学入学後に伸びる素質の評価と AO 入試の役割

小笠原 正明^{1)*}, 阿部 和厚^{1,2)}, 石川 健三³⁾, 岡元 昭道⁴⁾, 玉田 茂喜⁵⁾,
西森 敏之¹⁾, 野坂 政司⁶⁾, 長谷部 清⁷⁾, 細川 敏幸¹⁾, 目黒 和秀⁸⁾

¹⁾北海道大学高等教育機能開発総合センター, ²⁾同大学院医学研究科, ³⁾同大学院理学研究科

⁴⁾北海道立札幌東高等学校, ⁵⁾北海道立札幌北高等学校, ⁶⁾北海道大学言語文化部

⁷⁾同大学院地球環境科学研究科, ⁸⁾北海道立札幌南高等学校

Evaluation of Students' Ability which is Essential for the University Curriculum, and the Role of the Admissions Office System

Masaaki Ogasawara,^{1)**} Kazuhiro Abe,^{1,2)} Kenzo Ishikawa,³⁾ Akimichi Okamoto,⁴⁾
Shigeyoshi Tamada,⁵⁾ Toshiuki Nishimori,¹⁾ Masaji Nosaka,⁶⁾ Kiyoshi Hasebe,⁷⁾
Toshiyuki Hosokawa,¹⁾ and Kazuhide Meguro⁸⁾

¹⁾Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University,

²⁾School of Medicine, Hokkaido University, ³⁾Graduate School of Science, Hokkaido University,

⁴⁾Hokkaido Sapporo Higashi Senior High School, ⁵⁾Hokkaido Sapporo Kita Senior High School,

⁶⁾Language Institute, Hokkaido University, ⁷⁾Graduate School of Environmental Earth Science, Hokkaido University,
and ⁸⁾Hokkaido Sapporo Minami Senior High School

Abstract—Many of the troubles observed in school education in Japan are said to be caused by severe competition in the entrance examination for universities. However, the decline of the 18-year-old population that began in the 1990s is making it possible to accept all the applicants to higher education institutions. Such a change in the competition may lead to mitigation of the strained relations between universities and students and, at the same time, the declining of the quality of university students. We are now facing the fact that the traditional "quiz-type examination" is not effective any more to select good students from among the applicants. In this project, a team organized by high school teachers and university teachers discussed how to evaluate students' abilities which is essential for studying university curriculum, and tried to design a new type of admission systems that can be effective in this changing society.

(Received on March 6, 2000)

*) 連絡先 : 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目 北海道大学高等教育機能開発総合センター

**) Correspondence: Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University, Sapporo 060-0817, JAPAN

1. はじめに

日本の初等中等教育の現場で生じているさまざまな問題は、過酷な受験競争に起因しているものが多いと言われている。ペーパーテストで大学入試の合否を決める方法は、中学・高校における学習への重要な動機づけとなっている一方、種々の好ましくない影響を学校教育にもたらしていることも事実である。たとえば、過度の点取り競争に勝ち残るための丸暗記や機械的な解答法の習得が、高校生の考える力を急速に衰えさせているのではないかという議論もある（西森 1998，岡部 2000）。

しかし、1990年代後半から始まった18才人口の減少は、いわゆる「学力の底抜け現象」を伴いながら、皮肉にもこのような大学入試をめぐる環境を一変させようとしている。希望者全入の時代を目前にして、日本の大学はペーパーテスト一本槍から脱して、新しい選抜方法を開発する必要がある。新しい選抜方法においてもっとも大事なことは、大学入学後、あるいは大学卒業後に伸びる素質をどのように評価するかということである。ペーパーテストで計られる資質は、大学あるいは大学院課程を優秀な成績で修了するための資質と一定の相関関係があるのは事実である。しかし、例えば入試センター試験で低位の成績であった学生が、大学卒業時に高い評価を得るという例は決して希ではない。また、卒業研究や大学院の研究の段階ではじめて高い能力を示す学生もある。大学を出てから社会で実力を発揮する人も加えれば、ペーパーテストの入試の成績と、その後の進歩との相関を見いだすことはむしろ難しくなるかも知れない。今後は、一般的なペーパーテストの成績は必ずしも良くないが、総合的あるいは潜在的な能力の高い学生を見いだすための方法を開発する必要がある。この研究では、高校および大学の教師からなる研究グループが

- 1) 大学に入ってから伸びる資質とは何か
- 2) 大学で伸びるために必要な基礎学力とは何か
- 3) それらと教育はどのように関係するか
- 4) それらをできるだけ正確に評価するためにはどうしたら良いか

を、それぞれの体験をもとに整理して提案し、新しい選抜方法との関係を検討した。また、これまで行われていわゆる推薦入試を参考に、予想されるAO入試の問題点を検討した。なお、本報告の末尾の「6. 入試

改革の展望」の部分は、大学教師側の責任において記述したものである。

2. 研究の方法

研究会に参加している大学および高校の教員全員に対して記述式のアンケート調査を行い、それを材料に討論を行った。このアンケート調査は、得られた結果を統計的に処理するためではなく、問題をさまざまな角度から分析するために行われたものである。アンケートの範囲を研究会の参加者に限定したのは、それぞれの回答の意味について時間をかけて討論が出来るようにするためである。その後、別途に検討された北大のアドミッション・オフィスによる評価方法の検討を行った。

アンケートへの回答者およびそれぞれの担当科目または専門は以下の通りである。

- 高校教諭 A (国語); 同 B (英語); 同 C (物理)
 大学教師 A (物理); 同 B (化学); 同 C (英語);
 同 D (数学)

以下の記述では、それぞれの意見の末尾に、例えば (高校・国語) あるいは (大学・英語) のように略記する。

3. 大学に入ってから伸びる資質について

設問の1：大学に入ってから伸びる資質とは何か？

- ・ 大学に入ってから意欲を持って勉学し、それなりの成果をあげている学生たちが在学中に示した共通点としては (1) 文系・理系といった枠に収まらない旺盛な知識欲 (2) 納得するまで追求する探求心 (3) 集中力 (4) 謙虚さなどがあげられる。(高校・英語)
- ・ 筋道だてて論理的に考察する論理的思考力、「自分の頭」で考える発想のユニークさ、細部にとらわれず全体的に判断できる判断力、自分の考えを文章を用いて正確に表現する文章表現力、自分の考えを分かり易く話す自己表現力、不明なことを納得するまで追求する探求心、協力しながら研究や作業をする力、自分の欠点を自覚して努力をする謙虚さなどが重要である。伸びる資質の背景として、書物を読む習慣があること、研究論文を読んだり書いたりする力があることなどがあげられる。(高校・国語)

- ・キーワードとしては、思考力、分析力、および判断力である。(高校・物理)
- ・人間の行動や言語と思考・認識との密接な関係などについて、知的好奇心を持っていることが大事である。常識を相対化できる視点と疑問を感じる能力、自分が求める情報を的確に探し出す能力、対象領域の広さや検証すべきデータの膨大さに圧倒されずに研究対象に10年でも20年でも取り組むことができる持続的な力、既知の枠組みを超えて、異質なものを結びつけたり、結合したりする編集的な構想力としての想像力が必要である。また、考察の積み重ねを論理的に発展させる思考力、生命、歴史、社会などの根底に自己を結びつけることから生まれる精神的な構えなどが必要である。(大学・英語)
- ・大学に入ってから伸びる資質と大学を出てから伸びる資質とは必ずしも同じではないように思う。共通する資質としてあげられるものは、1つは学力で、統計的には勉強が良くできる人は成功する確率も高いと思う。それに加えて、会社に就職して成功する人は、人間の幅が広い、すなわち、生活上の経験を積んでいる、人とよくつきあう、興味の幅が広い、人間関係において聡明であるなどの特徴がある。一方、学問の世界で成功する人は、どちらかと言えば個性の強い人で、自分の考えにこだわる傾向があり、人並みすぐれた執着力や忍耐力がある人である。共通する性格として、考え方が合理的でそれをきちんと他に伝えることができることがあげられる。(大学・化学)
- ・抽象的概念を理解する力と論理的思考力、ものごとを客観的かつ批判的に見る力、一つのことにについてさまざまな視点から見る習慣、態度、自ら問題を見つけだす力。(大学・数学)
- ・大学で学ぶことがらをマスターできる学力(学ぶ力)が十分あること。大学に入ってからでも向上心を持ち続け、人生に対するモチベーションまたは目標を持っていること。(大学・物理)

まとめ アンケートの回答者は、大学教師であるか高校教師であるか、専門分野が何であるか、にかかわりなく、大学で伸びる素質とは「広い意味での学力、コミュニケーション能力および精神的、心理的な活力」と考えている。資質に関する見方は、抽象的なレベルでは驚くほどの共通性がある。大学の数学の専門家が特に「抽象的概念を理解する力」をあげたの

は、この能力の低下が近年著しいからであろう。

設問の2：大学で伸びるための基礎学力とは何か？

- ・各教科のミニマムエッセンシャルズを身につけていること。高校においても、一つの教科を教えるとき最低限これだけははずせないというものがある。(高校・英語)
- ・多くのことがらに関心を示す一方、地道に積み上げていくことが必要。小手先の技術ではなく、自分の頭で考える訓練を行い、特定の科目だけでなく多くの科目を高校段階で学習していること。(高校・物理)
- ・「基礎学力」の定義は、数量化して測定できる教科の力プラス思考力、表現力などであろう。高等学校では、多くの科目を名目的な履修ではなく、きちんと勉強しておく必要がある。具体的には、数学、理科(物理・化学・生物)、英語、国語の4教科の力を持っていることである。(高校・国語)
- ・日本語の力。これにはボキャブラリーの力、論理性、明快さ、多様性などが含まれる。数学、物理、化学の基本を良く理解して、それを応用できること、読書の習慣を身につけていることなど。上にあげた3つの科目は、効率的に身につけることができる年齢という意味で、その基礎を勉強すべき年齢がある。それを過ぎるとマスターするのに非常に苦労するか、あるいは結局は身につかず終わることが多い。(大学・化学)
- ・大学で学ぶに際してあらかじめ身につけておくものとしては、物理学なら、物理現象ならびに簡単な物理法則への理解、物理的思考方法および論理的思考法の理解と習得が必要である。例えば、力学の基礎、電磁気学の基礎、熱学・統計力学の基礎、ミクロ現象の基礎など。スポーツや芸術では基礎体力や基礎技術の習得が不可欠なはずだが、物理などの学問でそれに対応するものは何だろうか？ 自発的に考える訓練、知的好奇心、総合的思考、熱狂的集中などがそれにあたるか？ (大学・物理)

まとめ いわゆる主要3教科に理科の科目をいくつか加えたものを基礎学力と考える人が多い。日本語の力も重要である。「社会科」が基礎学力に加えられていないことが目につく。単に回答者の中に専門家がいなかった理由かも知れないが、他に理由があるかも知れない。

設問の3: 以上の資質は教育とどのように係わっているか?

- ・各教科のミニマムエッセンシャルズにプラスして、その先の展望を持たせる、あるいはその先を垣間みさせることが伸びる資質を育てる一助になる。(高校・英語)
- ・「部活が活発な年度は入試でも良い結果がでる」と言われている。また、3年間地味にコツコツ積み上げて行くタイプの多い学年より、多少人々の眉をひそめさせるような行動をしても、行動力があり、やんちゃで活気がある学年が良い結果を出すことがしばしばある。ただし、彼らのエネルギーは、方向を誤れば単なる腕白集団になってしまう危険性もはらんでいる。水準以上の生徒は、どのような分野でもそれなりに対応は出来ると思う。いろいろな動機づけを行うことで、彼らの意識との共鳴が起これば、エネルギーは良い方向に向けることができる。(高校・物理)
- ・「基礎学力」は、操作的、機能的に定義されるものである。学習指導要領は抽象的に書いてあるので、何をどこまで教えるかという具体的内容は「入試」によって決まる。配当単位数を含めて、カリキュラムをどう作るか、教科書をどう扱うか、授業内容と正規の授業以外の演習をどう行うかは入試の性格によって決まる。たとえば、AO入試の規模が大きくなればこの方式で評価されやすい生徒を育てることになるし、推薦枠が拡大されれば「推薦に値する」特色や個性に磨くように指導することになる。(高校・国語)
- ・資質には持って生まれた部分と後天的に伸びる部分の2つがある。教育では、基礎を教える、刺激を与える、長所を見つけて伸ばすことが必要である。(大学・物理)
- ・教育で一番影響力があるのは先輩と先生。学問に興味を示さない学生や生徒がいるかも知れないが、人間観察は行っている。(大学・化学)
- ・旧来の教育では、小学校から大学まで、それぞれの学問領域の既存の研究成果において評価が比較的定まっている基礎的なものを段階的に学ぶことが大きな柱となっていたと考えられる。このように学力が知の遺産を受容吸収する力であると見るだけでなく、学力の本来のあり方を、知の遺産に新たに積み重ねられるべき創造的研究を推進する力として見ることも欠かせない。このような視点

から教育のあり方を考えれば、生徒・学生は、広い関心に支えられて自分で問題を発見し、自らの取り組みによってその解決を図るように育成されることが望まれる。教師の側からの情報提供はどれほどきめ細かなものであってもいいわけであるが、その情報提供は、生徒・学生の側の問題発見の喜び、問題解決の喜びを導くためのものでなければならず、それを奪うものであってはならないだろう。(大学・英語)

- ・いくつかの基礎分野の教育では、パターン化したものを「強制的」に覚え込ませることが必要である。特に日本語、語学、計算、実験、実習など。しかし、ある年齢、あるいはあるレベルからそのようにして身につけたものを活用して議論し、「問題を解く」訓練が必要になる。受験教育では、このレベルの訓練をパターン化してしまうという悪い傾向があように思う。正解が1つの場合はそのような機械的な訓練でよいかもしれないが、実際の問題の多くは正解が分からないのだから、このような訓練では問題は解決しない。正解が分からない状態で「正解は何か」を議論し推理できる力を養う必要がある。(大学・化学)
 - ・日本語の基礎的な力は、センター試験で代表されるようなマークシート方式穴埋め問題が解ければよいという考えで入試対策用の勉強ばかりしてはつかない。塾・予備校などの受験テクニックの蓄積は学生に効率的な勉強の仕方を教えるが、自己流の工夫などでは太刀打ちできなと学生に思わせることで、「自分で考える習慣・態度」を育てることに対して害がある。受験科目以外のものもさまざまな人間の知的活動を集約したものであって面白いということを伝えられないか。これも大学でも専門以外の一般教育をどうやって興味を持たせるかという同じ問題がある。根気強さ、忍耐力、知的好奇心、知的向上心を身につけさせるのは難しいが、いくらか身につけている学生は大学に入ってからでも学んでいくことができ、きっかけさえあればいくらか伸びていく可能性がある。入試で優秀な成績の学生でも、知的向上心に欠ける志の低い学生は脇道にそれやすい。(大学・数学)
- まとめ この設問は、表現があいまいなせいか、回答の内容が分散しているのが特徴である。勉強以外の場での生徒の雰囲気の問題にしたものもあるし、「学力」の再定義を試みているものもある。特に大事

と思われるものは、基礎学力は操作的に定義されるものであるから、そのための教育には入試の内容が重要な影響を及ぼすという指摘である。従って、大学側が入学後に課題解決型あるいは創造的能力育成型の教育を行いたいのであれば、そのような能力を評価できるような選抜方法を採用しなければならないということになる。しかも、それらを具体的に提起すべき段階に来ているという点が重要である。

4. AO方式入学者選抜——受験生へのアプローチ（北海道大学試案）

以上のような議論の上で、従来のペーパー試験に加えて、どのような選抜方法をとれば、本質的に能力の高い学生を見分けられるかを具体的に検討する必要がある。その例として、北海道大学がこれから採用しようとしているAO入試の内容をとりあげて議論した。

北大のアドミシヨズ・オフィス構想研究会の中間報告によれば、AO方式入学者選抜（AO入試）で従来と最も違う点は、選抜に先だって大学の側から望ましい学生像に関するメッセージを受験生に向かって発することである（AO研究会1998）。このメッセージは、受験生が理解でき、また社会的に説明できるものであることが前提である。その呼びかけに応じてきた受験生について、大学側はさまざまな評価を行うが、その評価には客観性が求められる。現在のところ、次の2つの面における評価が最も重要と考えられている。

(1) 人物評価：各受験生が持つさまざまな優れた資質を自ら表現してもらう。自己推薦文、課題論文、面接などにより評価する。当然のことながら、大学で学ぶための基礎学力も評価する。

(2) 活動評価：優れた資質はこれまでの行動に現れているはずである。それらを評価するためのさまざまな活動記録や実績を提出してもらう。

これらを一定の客観的基準にもとづいて評価して、入学者を決める。

受験生は、北海道大学のAO入試について次のような方法で情報を得、さらに内容を把握し、応募準備をし、応募ののち試験を受け、選抜される。

(1) 公開情報：報道——インターネットのホームページ、受験支援機関

(2) パンフレット、小冊子、大学案内

(3) 応募要項

(4) 説明会（リクルート）

リクルート活動においては面談によるカウンセリングも行うが、これは事前面接もかねる。応募時に必要とされるものは、以下のようなものである。

(1) 他者評価書類：内申書、学力評価表、大学が用意する学力、資質についての推薦書（最後の書類は必ずしも要求しない）

(2) 自己評価書類：志望理由書、自己推薦書（小論文をかねる）、自己評価表（大学が用意する）、活動記録や実績

選抜においては、大学が求める基本的な学力の確認と評価、課題論文による論理性、思考力、資質の確認と評価、および面接による資質と人物像の評価を行う。このようにして合格が許された入学者に対して、大学は最初に発したメッセージ、すなわち学ぼうとする意欲に応え得るような特徴のあるカリキュラムと教育内容を保証する義務を負うことになる。

まとめ この案では、大学側からのメッセージの発信、すなわちリクルート活動が重要視されている。その点を別にすれば、従来の選抜方法ともしっかり異なる点は、高校の内申書および課外活動を重視している点であろう。内申書と本質的な学力との相関が高いことは、この研究会において高校の側から特に強調された。課外活動の評価については、人によって分かれるが、「受験勉強のみに特化していないかどうか」を判定するためには有効であろう。

5. AO入試の問題点

北海道大学のAO入試の概要が明らかになる前に、本研究では従来から行われていた推薦入試の問題点について、上と同様のアンケート調査を行い、その回答にもとづいて議論した。これまで、北海道大学のいくつかの学部で行われていた推薦入学は、高校からの推薦者の中からさらに選抜するという意味で、基本的にはAO入試の範疇に入る。従って、推薦入試について行われた議論の一部は、そのままAO入試についてもあてはまる。AO入試と直接関係する問題点は以下の通りである。

問題の1：一般学力試験との関係

・（推薦入試は）まさに2重の負担になっている。出願したことによるある種の安心感と、一般入試に

対応する準備のための集中力持続とで、精神的により多く負担を感じているようである。早い時期に、推薦合格を決定してしまうという手もあるが、それ以降の高校の教育に少なからず影響を与えることになる。(高校)

- ・書類作り、面接の準備などに時間がかかる。応募時に提出する志望理由書などで志望動機などの明確化を迫られ、今まであいまいにしていた部分を自分自身のために明確化するわけだ。これをしも「受験勉強の負担増」と言えば、純粹培養がベストというところまで逆戻りするだけだろう。当然の負荷と考えたいと思う。面接の準備にしても、興味関心を深めるための普段からの読書は当然のことなので、今更準備に時間がかかるという泣き言を聞く必要はないだろう。(高校)
- ・推薦入試と一般入試に備えなければならない受験生にとっては、かなりの負担となることは十分予測できる。模擬試験や学校内でこれまで蓄積した情報にもとづいて高校側は対応するだろう。私が高校教師なら、そのような対応をすると思う。(大学)
- ・高校から推薦される応募者が、一般学力試験でもよい成績をとれるという相関関係があるならば、大学から見た推薦入学制度の必要性は、一般学力試験で良い成績がとれないかもしれない(あるいは一般学力試験とは異なる観点から合格させたい)応募者の中に優れた素質の持ち主が潜在している可能性を掘り起こすことにあると考えることができる。そのような応募者の個性を考えると、知的好奇心が旺盛であるけれど、その好奇心が既存の枠組みに収まりきらない事象や概念などに向けられているというタイプが考えられる。(大学)

まとめ 2重の負担になるという指摘が多い。しかし従来の受験勉強では培えない日常生活あるいは経験から自然に身に付く能力も評価されるのだから、むしろ負担が軽くなるという見方もできる。志望動機など本来明確にしておくべきことがらが問われるのだから、今さら泣き言をいうべきではないという高校サイドからの発言は重みがある。

問題の2：タイムスケジュールに関して(9月締め切り12月合格発表としたときの問題点)

- ・高校サイドでは十分対応が可能である。「成績」が確定していないことを難点として指摘されるかも

知れないが、評価レベルは未確定であっても、大学で学ぶのに必要な個性・能力の点での評価ならば十分にできるだろう。むしろ合格決定までの時間の余裕を作って、半日かけて2000-3000字の論文を書かせてみると、適格な人物を見つけるのはもっと容易になるだろう。(高校)

- ・発表が12月では、不合格の場合、その後の指導が大変になるので、応募を早めにかつ発表も早めにした方がよい。(高校)
 - ・発表までの期間が長くなると、応募者の心が落ちつかなくて不安定な状態が2-3カ月間続くことになる。これでは長すぎるのではないだろうか?(大学)
 - ・応募はともかく発表は早い方がよい(不合格の場合に通常の入試に頭を切り替えるため)。(大学)
- まとめ 合格発表はなるべく早い方がよいと考えている。とすれば、合格後から大学入学までの時間をどう過ごさせるべきかという新しい問題が生じてくる。大学の方から一定の課題を出すのは一つの方法である。

問題の3：応募書類から学力をどのように判定できるか?

- ・どのような教科をどの程度履修しているかは確認可能であるが、学校間での比較は不向きである。また、中間層の学力差を正確につかむのは難しい。しかし、ある種の高校におけるA段階の生徒や評定5は、かなりの学力を反映している。(高校)
- ・ある学部のケースでは、各教科や科目の校内順位の提出を求めている。本校の場合、校内順位は、センターテストの教科科目ごとの得点順位や総合点の順位、さらに個別学力試験とも高い相関関係がある。校内順位から学力を判断しても大過ないと思われる。(高校)
- ・各種の模擬試験の成績、これは無理としても、模試などに基づく科目毎の学内順位などがあれば、大学の授業についていけるかどうかは判定できると思う。(大学)
- ・学力の判定は難しい。とくに学校が異なるとき、学力を書類から適正に比較することは難しい。このためには共通の尺度が必要。前年に北大に合格した学生のセンター試験の成績と北大の合格者ランキングなどが利用できないか?これらを事前に解析し、尺度化している必要がある。(大学)

- ・ 学校間の格差，地域間の格差を克服するための共通の尺度がなければ困難であると思う。その尺度には，北大への合格率，北大在学（卒業）生の大学における成績，高校時代の成績のデータを基礎資料として利用するのが有効であると思う。（大学）
- まとめ ある種の高校での校内順位は，学力判定の根拠としてきわめて信頼性が高い。しかし，校内順位に依拠すると，学校間格差の補正は避けられないとほとんどの回答者が考えている。

問題の 4：応募時に提出される志望理由書，自己推薦書，小論文などの意味

- ・ 必要なデータであると思う。教師の手が入るとしても誤字等に限定されるので，応募者本人の生の姿が反映されると思う。（高校）
- ・ 生徒はこれらの文書を書きながら，「理由」や「自己」について明確化していく。必ずしも多くないが，隅々まで目配りのきいた文書を書ける生徒は，能力的に高いと判断して間違いないのが経験則である。先生方が手を加えて直すことはある。しかし，面接で少し話をすれば「メッキ」の部分はすぐに剥げてしまうだろう。小論文より少し規模を広げた記述式の記事を面接の会場などで要求すると，これは総合力が端的に現れるものであるから，「手直し」にだまされる（？）心配は取り除けると考える。（高校）
- ・ 関心領域や関心の深さ，その着眼点，論述力の構成力，その表現力などを判断する資料となる。しかし，言葉による表現に現れにくい資質で，大学での学問研究に必要とされるもの（問題解決の引き金となる直感力や創造性など）を判定するのには役立たないだろう。（大学）
- ・ 書き方など受験産業からのアドバイスがあると推定されて，そのまま受け取るわけにはいかないかも知れないが，判定のためのある程度の材料になるのではないか。（大学）

まとめ 志望理由書と自己推薦書は必要でありかつ意味のあるものであるが，受験テクニックが入り込む余地がある。小論文は，短いエッセーではなくある程度の長さのものの方が評価の対象としてより重要になる。

問題の 5：ボランティア活動，スポーツ活動，課外活動，芸術，趣味，特技などをどのように評価するか

- ・ 生徒の多面性を知る手がかりとしては必要なことではあるが，それを絶対の条件にすることには反対である。しかし，大学に入学して伸びる学生とこれらのデータとの相関性があれば，具体的項目としてあげるべきである。（高校）
- ・ 生徒が学習活動以外にふりむけるエネルギーを持っていたことを示す材料としては有効なものだと思う。しかし，「余裕度」を見るときも，個々の項目相互の比較をして点数化したり優劣を付けたりというのは，そもそもが難しいことのように感じる。（高校）
- ・ 社会的関心，行動力，協調性，集中力，体力，創造力，持続力，企画力等々の面について有意義なデータになると思うが，これも共通の尺度が必要であると思う。スポーツ活動，課外活動，芸術などでは大会・コンクール・展示会などの成績のみを判断材料とするものではなく，どのような責任ある立場でどの程度の期間を活動してきたかという点も考慮すべきであるが，その活動の水準の学校間格差，地域間格差を含んだ尺度については十分な検討が必要になると思う。ボランティア活動では，活動内容については尺度が立てにくい，活動時間は数量化できるので，ある程度データになると思う。（大学）
- ・ 学校の科目以外の世界をみることによって，複眼的なものの見方が自然に身につくと考えられる。したがって，評価することは望ましいが，「学校の科目からの逃避」の場合もあり得るので，一定の学力を持っている場合にだけ評価すべきである。（大学）

まとめ 判定の材料として有意義だが，具体的に評価するためには一定の尺度が必要になる。それを作るのが難しい。

問題の 6：人物評価を多くの項目で適正に評価できるか。評価項目として，思考力，意欲，創造性，発表力，理解力，論理力，応用力，立案力，集中力，空想力，行動力，協調性，誠実さ，思いやり，指導力，明朗性，決断力，責任感，勤勉性，礼儀などが考えられる

- ・ 多くの生徒に全項目の評価をつけるとなると多くの時間を必要とするであろう（合宿でもしているような視点で観察する必要があるだろう。しかし，高等学校側で評価をつけるための合宿は多くの問

題を含む)。少数の生徒に対する評価であってもより適性な評価をするには、多くの人の目と多くの時間が必要であろう。尺度の違うものを、それぞれ何段かに評価できても、その合計点などが合否の決め手になるとしたら、正しいやり方とは言えない。(高校)

- ・例示された20項目を、個人内の力として5段階評価するなら可能なものが多いだろう。ただし、私なら全体の合計が何点以内になるといった条件をつけることにする。そうすれば、その人物の特徴が浮かぶと思われる。根拠となる事実を付記することにすれば、信頼度は上がってくるのではないだろうか。知的な側面に関する項目と、情意的な側面に関する項目ときれいに分けるのも、意図的に混ぜるのも両方面白そうだ。校内の他の生徒との相对比较を求められると、途端に苦しくなるが、医学の診断基準のようなものが明示されていれば大丈夫かも知れない。(高校)
- ・その本人に関してだけのことでなく、学校間格差や地域間格差を含む応募者全体の中から選考するための評価であれば、応募書類の審査のみでは共通の尺度なしには優れているかどうかを評価するだけでも困難であると思う。まして、5段階評価などはとてもできないと思う。数日間の合宿などによって、寝食をともにしながら行動や表情や反応などを確認できる場面があれば、参加者の中で誰がどの項目に関して傑出しているか、という程度の判断は可能であろう。(大学)
- ・クラスのすべての生徒に、そこまで詳しく見極めることは不可能であろう。おのおのの生徒について、いくつかの項目について、この項目は特に優れているとか、特に不十分であるとかなら評価はできるのではないか。(大学)

まとめ 正しい評価には時間がかかる。5段階評価はおそらくできないであろう。

問題の7：面接ではどのような方法でどのような点を評価するか？

- ・意欲的であるとか、人間性、創造性など多くの項目を評価できると思うが、どのような観点に立った質問をするかが大切であろう。(高校)
- ・上にあげられている人物評価の項目から選ぶと、意欲・理解力・論理性・応用力などであろう。グループ面接は総合力が端的に現れるのでよい方法

だと思う。木訥な地味な生徒は面接で損をしていることはないだろうか？(高校)

- ・個人別に行い、志望の理由とか将来の希望とかは当然としても、高校までに学んだことで何がおもしろかったかなど聞いてみるのもよいだろう。未熟でも、自分の言葉で自分の考えを表現しているかどうかを評価すべきである。学問に対する真面目な態度なども自然に評価のうちに入ってくるのは当然である。(大学)
- ・当該の学部で特に必要とされる資質の有無が評価されるべきであると思う。その資質の有無が測定できるような方式を採用しなければならないであろう。(大学)
- ・生きる力、社会性、人物的バランスを評価したい。一般学力試験でも多くを選抜しているので、ここでは人間性を重視すべきだ。価値の基準をそろえて、主観的でない評価をしなければならない。(大学)

まとめ 評価すべき素質に応じていろいろな面接方法が考えられるし、実際、目的に即したきめの細かい面接マニュアルが必要になるだろう。

6. 入試改革の展望

これまでのペーパー試験による入試には、それなりのメリットと公平性があった。しかし、受験生の絶対数の減少と質の変化あるいは多様化に対して、今後とも有効に機能し続けるとは限らない。それ以外の選抜方法も並行して取り入れることによって、課題解決能力および創造性を高める教育に適した学生を選抜することになるだろう。具体的には、求める学生像を明確にして、意欲、思考力、判断力、および表現力をより重視した方向へと向かうことになるだろう。それが大学の教育の質を変えることにつながり、ひいては大学受験生を多くかかえる高校の教育を変えることにもつながることが期待される。

しかし今後、入学者の選抜方法をどのように変えて行くにしろ、以下の原則は守らなければならない。

- (1) 大学教育を受けるにふさわしい能力および適性を評価すること
- (2) 公正、妥当な選抜方法であること
- (3) 高等学校以下の教育理念を尊重するものであること

それに加えて、高校教育の多様化の現実を直視し、

受験機会の複数化などの社会的な要請に応えるものでなければならない。

大学入学後、あるいは大学卒業後に伸びる資質を評価するためには、AO的な入試の導入は不可欠である。今後の大学の入学者選抜は、単に大学が入学志願者を「選ぶ」のではなく、大学が望ましい志願者を見出し、また志願者が望ましい大学を見出す双方向性のアプローチとなろう。したがって大学は、入学対象者に対して、どのような教育を与えることができるかを常に明示的に示す必要がある。さらに高校教育に望ましい影響を与え、望ましい資質を育むような選抜の方法がどのようなものであるかを常に探し求める必要がある。そのためには、当面は「トライアン

ドエラー」の方法をとることになろう。

参考文献

- 岡部恒治 (2000), 「「分数ができる大学生」にするために」, 『日本数学教育学会誌』 82, 30-36
- 北海道大学アドミSSIONズ・オフィス構想研究会 (1998), 『中間報告 (概要)』
- 西森敏之 (1998), 「日本における大学教育改革」, 『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』 4, 14-23